

一輪挿しのリリー

会田 彩奈

私がこの病棟に来てから四日目のことだった。休憩室というか、喫煙室のような場所に立ち寄ると、おそらく未成年だろう一人の少女と目が合った。彼女は軽くほほ笑んで私に会釈をした。

「見慣れない顔ね」

彼女は肩のショールをかけなおしながら、ぼんやりしたような顔で私を見つめていた。

「この病棟は初めて？」

私が頷くと、彼女はゆっくりと、そう、と言った。

「ここは日当たりが良くて気持ちいいのよ」

そう言っただけで彼女は厚い二重窓の外を眺めたが、建物のコの字型になっているため向かいの窓と、ガラスに張り巡らされた細い針金が見えるだけだった。白を基調とした建物は、見ようによっては清潔だが、どうにも冷たく無機質な印象を受ける。

私は彼女の隣に腰を下ろした。白いソファアームはどこどころ傷つき、汚れていたが座り心地は申し分ない。彼女の言う通り、ほんのりとあたたかい陽射しがこちよかった。目の光に透かされて、彼女の青白い顔がさらに白く透き通っているのが眩しい。

私たちの微かな沈黙から少し離れたところで、中年の

女性が一心不乱に煙草を吸っていた。ここでは暇すぎてストレスが溜まるのだと、誰かが言っていたのを思い出す。

「この病棟には慣れたかしら」

私が曖昧な顔をしていると、彼女はそうよね、と言っただけでまた窓の方を向いてしまった。

さっきの女性は、何本目か分からないが新しい煙草に火をつけているところだった。

「最近残念だと思うことは、病室に花瓶を置けないことかしらね。かわいい花瓶があったのだけれど。とはいっても、私には飾る花なんてないのだから、どうしようもないわね」

彼女はぼんやりとしたままくすくすと笑った。時々窓の表面を指でなぞりながら、どこか遠くを見ている。不思議と不快には感じなかったが、儂げな印象だった。それは彼女の青白さや身体の線の細さのせいもあつたのだろうが、もともと根本的などころから、彼女は消えてしまっただけな薄さだった。

私は自分のスリッパの爪先を見つめながら、今日これからすることを考えていたが、昼食を終えたばかりなので何もすることがなかった。

それから彼女とぼつりぼつり他愛もない話をして——と言っただけで一方的に話すだけだったが——、彼女はここ病棟に来て長いということ、誰も見舞いに来ない

こと、花が好きだったことを知った。私は黙って彼女の話を聞いていた。どうにも不思議な心地だった。こうして誰かと話をしていく(と言っても私は相槌を打っていないだけだ)なんて、今までの生活では考えられないことだったからだ。それはたぶんほとんど私のせいと言っている。私のコミュニケーション能力の欠如といったら、つくづくひどいものだと思う。他人との距離はどんどんと開いていく一方だった。

「最近夢に見ることがあるの。ここを退院したら、世界はどう変わっているのかって。もう私を受け入れてはくれないのかしらね。いつここを出られるのかなんて分からないけれど」

そう言いながらも、彼女の表情には何の曇りもなかった。彼女の表情は、はっきりしているようでよく見えない。向こうで煙草を吸っていた中年の女性は、いつの間にかいなくなっていた。

「あなた、ベラドンナリリーっていう花を知っているかしら？」

突然の問いに私がゆるゆると首を振ると、彼女は気にした様子もなくにこりと笑って続けた。

「ユリのような花なのだけれど、白っぽいピンク色をしていて、とてもいい香りがするのよ。石鹸のような……そうね、ジャスミンかローズのような、ほっとする匂い。私、その花がとても好きだったの」

私は見たことも聞いたこともないが、彼女はその花のことを思い出しているのだろう、心底幸せそうな顔をしていた。

「こういうところにいるとね、好きなものことでも考えていないとすることがないのよ。あなたもそのうち分かるわ。どんどん自分が薄まっていくの」

彼女はスリッパをひっかけながら足を揺らした。こうしていると、年上に違いない私にも臆せず話をする彼女も年相応の幼さを孕んだ普通の少女だった。

「私はね、もうここから出られないのよ、たぶん」

彼女がそう言った後、わずかに沈黙が訪れた。遠くからガシャンという大きな音が聞こえてきて、少し遅れて叫び声がこだました。

「誰かしらね。きつと保護室行きだわ」

保護室。そう聞いて私は少し身震いした。それは入院したばかりの私が昨日までいた部屋の名だった。

「あんなところはもう二度とごめんよ。あなたもそうでしょう？」

私はうつむきながら、こくりと首を縦に振った。叫び声はまだ止まない。

「きつと私たちを退院させる気がないのよね。ここは墓場よ。姥捨て山。こんな窓ひとつで、建物ひとつで、カトルテひとつで、私たちは正常から切り離されて、『異常』と呼ばれるの」

私はいたたまれなくなつて天井を仰いだ。頼りない蛍光灯の周りには金網が張り巡らされ、私はなんだかその金網が目刺さるような気がして再び目を伏せた。

異常。分かつている。そのくらいの自覚は、ある。

「初めて閉鎖病棟に来た時は、こんなところにいるくらいなら死んでやると何度も思つたわ。ここはとても死の臭い……そうね、死に近づこうとする人間の臭いとも言うのかしらね、そういう臭いが強いもの。でも、死ねない。絶対に。当たり前よ、そのための病棟だから。もう私、諦めたわ。諦めるしかないの。担当医は『私』をここから出してはくれないし」

彼女は自嘲気味に俯くと、その白い手でそつと私の頬を包み込んだ。

「輪郭、その輪郭はいつまであなたのものかしら。自分が均されていくのに耐えられる？」

彼女の腕は少しづつ下がり、いつの間にか私の首にあてられている。しかし、不思議と恐怖はなかった。

「あなたは、正常かしら？ 違うわよね。だからここにいるのだから。でも、何か間違つたことをしていたかしら？ 別にそんな、手首を縫つたり胃を洗浄したりしなきゃならないようなことを『間違つた』なんて言つてるわけじゃないのよ」

そう言いながら、彼女のか細い手に力が込められた。私は声をあげず——否、あげられないのだが——じつと

彼女の眼を見ていた。

この世界の構造は紙一重だった。正常は容易に異常とすりかえられる。人は「異なるもの」に怯え、自身を「普通」に置くことに余念がない。その中で私は私のまま生きる事ができなくなった——だからここに来た。来るしかなかった。終着点に辿り着けなかった者の末路だ。

救急車で運び込まれ、目を覚ましてから連れてこられた閉鎖病棟の保護室で、安定剤を打たれ続けながら三日三晩蹲つていた私。どれほど無様だったことか、悔しかつたことか。それならばいっそ、ここで途切れてしまつてもかまわない。私は生きるためにここにいないんじゃない。死ねなかつたから、ここにいます。生きることも死ぬこともできないでいる、宙ぶらりんだ。それは、きつと彼女も同じことで、もしかしたらここに多くの人にも言えることなのかもしれない。ここは死を諦めさせる病棟。死ねないというだけで、生きることができわけじゃない。

私も彼女もきつと同じだ、生よりもむしろ死の先に「自分」を、そして救いを見出せると信じている。……それはそんなに滑稽なことだろうか。異常なことだろうか。彼女の形のいい眉が前髪の奥で歪められる。

「私は狂つてなんかいないわ。ただ、少しだけ、そう少しだけ、人よりも世界に敏感になつてしまつただけ」  
彼女は私に、そして自分自身に言い聞かせるようにそ

う言った。黒い髪が私のすぐ目の前で揺れている。泣いて、いるのだろうか。私はそれに応えることができない。もうずっと前に、声を出すことなど忘れてしまった。空気の流れをせき止められた喉がひゅう、と鳴る。彼女の、大きく見開かれた目はどこを見ているのだろうか、私だろうか、それとも、もっと別の何かだろうか。

「みんな、みんな『私』を殺そうとする！ 私をいよいよに自分の盾に使う！ 狂っているのは私じゃない！ みんなの方だ！ 世界の方だ！」

ぐ、と手に力が込められ、私の視界がどんどんと霞んでいくのが分かった。このまま、死ぬのだろうか。

「みんな死んでしまえばいいのに！」

彼女がそう捲し立てたとき、大きな足音と声が出て何人かの看護師たちが彼女を取り押さえた。解放され、どつと流れ込んでくる酸素に肺が緊張する。頭がガンガンして周囲の音が脳髄に響く。

取り押さえられた彼女は、憑き物が落ちたような顔をしていた。最初に会った時のように、ぼんやりと私を見て笑った。

「ね、また会いましょう」

彼女は保護室に連れられて行ったのだと思う。その後のことはよく知らない。私も病室に連れ戻されて安定剤を打たれた。今夜はよく眠れるだろう。彼女の笑った顔が頭にこびりついて離れないけれど。

あれから一年の歳月が流れた。私は相変わらず閉ざされた世界の住人のままだった。彼女はといえば、風の噂で死んだと聞いている。自殺だ。開放病棟に移った二日後のことだったらしいが、詳しいことは知らない。もしも彼女の言う「諦め」が医師たちの目に「死への諦め」だと映っていたのだとしたら、なかなか皮肉な話だ。

昨日、私は花を届けてもらった。花瓶は持ち込めないので、適当なコップで一輪挿しを作った。彼女はその花が好きだったと言った。ベラドンナリリー。その名を咀嚼しながら戯れに花言葉を調べてみると、無機質な明朝体が記した「ありのままの私を見て」。

そうか、彼女はやっぱり狂っていなかったんだ。

私は乾いた笑いを漏らしながら、針金越しの空の下で首に手をかけた。